HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	方間舎楓京『俳諧藻塩草』翻刻 (5)
Author(s)	冨田, 康之
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(3), 99-135
Issue Date	1996-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33663
Type	bulletin (article)
File Information	44(3)_PR99-135.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

方間舎楓京『俳諧藻塩草』翻刻(5)

冨田康之

俳諧藻志保草　五　(表紙)

もしほくさ　五

時節庵東行餞別

魚喰ふ西行髭を惜まぬ宗祇起臥安き蕉翁の酒落を追ふて吾妻へ旅たつ法師あり四海皆兄弟なるに今や花なき草枕にましてや風雅の人をつたひ行むには（1・オ）屣を倒にして槌て庭はくあるしの行さき〳〵に迎てしば〳〵しと情の宿も多かるへし

さそ旅ね人のこゝろの柳かけ　半掃庵也有（1・ウ）

獨吟哥仙　　玄二堂

猿猴の手に及はぬをくらけ取り
月も出汐の風薫る時
明はなす窓の物好誉られて
名代のうとんよう賣れる也
結ひ振も年に似合ぬあたま付
太鞁をたゝくけふは遊ひ日（2・オ）

ウ

冨士の山裸にむいて晴上り
お輿か立は皆か平蜘
吉左右の飛脚は顔に知れて居る
七ツ下りの食に事欠
唐紙の繪さへ淋しき貧乏寺
はら〳〵はらと落葉する音
鐵鉋をかついて月の夜もすから
主をはこくむ身は袖の露（2・ウ）
とひろくの徳利を振れと鳴もせす
碁盤も碁笥もうつしたい
何所も角も二三日花の真ふくら

火つりをかけて参る石山

二　古鳶の姑に娵のかほよ鳥
明るふさいて邪广な衝立
かひた物出してこはがる長霖雨
恋も無常も質見世にある（3・オ）
そのやうな噺は何所も沢山な
理屈くさいは人の疵なり
両方へ流るゝ水の川境ひ
一本松の注連は何神
斯てはと狂哥に腮をかゝへさせ
破れた衣面白もなし
氈敷て座敷輝くけふの月
うつむく萩に荻の上風（3・ウ）

名
有つかぬ身は肌寒き娘とも
腹かたつやら文を引さく
天竺も唐も金にはつまるけな
物か道理かいやと云れぬ

北大文学部紀要

寒明て七十五日華は咲
鯛のさくらは俎にこそ（4・オ）

天地の世話を頼まさる仙人の奢りといつは狭きを廣キに楽しむの謂なるへしさるを塵俗に居しなから方五十坪の閑地に嶮山の魏峩として平野の廣漠たる詠を構へ長房か師の酒入を招貌なる（4・ウ）胞兄京子か楽しみを楽しむとして

彼壷の中の詠めか少トの間の　　甘閑窓
右手に百足山左り白山

玄二堂の雅翁わかト居を賀して佳章を給ふそも〳〵此翁内に積の和順千閭仰き貴ひ外に發する（5・オ）英花万里風に薫れり其一句錦繡にまさり一語千金に越たり愚なる身も金玉の詠に照されて　後　小鮒の鯉に成心地し　前　腐草の蛍に化し　かの一たひ竜門に詫すれは價十倍すとは是ならんと思ふ（5・ウ）

瀧の水かゝるも涼し龍の門　　銀河拝書
下手に物いふは勿論にして上手に舌動すも禍門の額顕然たり
囀りのよい咎に身をうつら籠　　甘閑窓（6・オ）

甘閑窓

胞兄方間のあるし去年は姉子の病床に労はりけるも目出たく順快の陽氣を得侍り今朝や快晴の初日を仰き産神の廣前に喜ひ額きて謝を奉るものならし

鈴にいさむ神楽や午の年かしら（6・ウ）

試毫　　玄二堂稿

田家寂しけれと春を寿くに賑はし
雑飲も菊も福の字おもしろし

守歳

かはる姿の我身をおもへは
としの瀬にあり鬢髭のさらし臼（7・オ）
碩人卜築倚高岡瑶草琪花焼砌香此日相逢堪一笑酔中恍惚到仙郷

向

船橋氏卒賦　　松平秀雪艸（7・ウ）

短夜や口説なからにむかひ駕　　半掃庵公
鐘つきや盗む隙なき夏の夢
田植より笠きぬ鷺の色白し

端午　　時節庵

伊勢か家のむかし匂ふや薺篭（8・オ）

探題

狐よりうへ行智恵の蛍かな　　時節庵
風わけて遣ふ逢夜の團かな

人嫌ひしてや深山のかんこ鳥
寐過しに楽書したき紙帳哉
出つ這つする子を呵る蚊帳かな
昼貌や弱い一重の物なから
与市にはかしそこなひの扇かな（8・ウ）
夕顔や居風呂の月のちつて行
声のよい楊貴妃も有田うへ哉
諷はせて夫もあとに田植かな
足もとに風新しき青田かな
蝙蝠や夜明の鐘に行當り
蛙には口も明せす蝉の聲
その顔もせて居る昼の水鶏かな

右時節庵（9・オ）

賛神水盆文　　堀尾秀斎

楓京雅士此神垣に年ふる岩の手水鉢を寄附し扇嶋と云二字を居られたり夫手あらふは祓にして水のちり芥を洗ひて日影をうつし風の雲霧を吹やりて月の光りを増す人にしては悪を去り善にうつり元の心を（9・ウ）汲て神の明らかなるに到る道也とそしかも風水釜の傳へありて心に千引の岩を立て丈夫なるを本とす扇の風を生し嶌のしまりつゝし

み岩尾に水をたゝへたる深きこゝろは千代に八千代に苔のむすまて清く淡き水を日々に新たに立より結はゝ（10・オ）

湯の盤にもまさりて神慮もさそや涼しと受納し給んと大和假名の詩作りほ句して祝す

貴賤群集の参詣は皆　爰に手洗ふ浄き岩

天の恩井の水を湛て　千代に八千代にたへす汲哉

岩高く吹風清し水涼し　銀河（10・ウ）

神をすゝしめ奉るは無垢清浄をもてむかふにしかし

皆つかへ扇の嶌の手水鉢　甘閑窓

好に慮り費へす造るに力労せすして此最上の品を得しもよしや世にいふ信あれは得あるの感應（11・オ）にして神も面白く御覧し凡夫も見事と褒美せんを近来の流行なる狂哥一首に説て興し侍る

うこきなき宮居にすへし水鉢は

嶌のあふきのよい要石　甘閑窓（11・ウ）

雨尾山の精舎に風雅尊子達の一席につらなりて

花鳥の臺は高し蝶の舞　冨牧

山も霞の袖かさす時　万愚

案内の親仁か顔も長閑にて　南喬

云そこないをまきらかす也　楓京

ウ　夜を昼にして吉原に更ル月　愚（12・オ）

灯篭の色も野の錦より　牧
御住持は秋を感して蹲り　京
負ては戻る例の碁中ま　喬
木履ては扨もひやいな辷り道　愚
貴有ねの利生あらき神垣　京
白妙の雲より續く山さくら　喬
帰りしほ知る厂の幾行　京

二　永キ日を舩にゆらるゝ旅日記　牧（12・ウ）
聞にくふても所京談　喬
入聟に異見を交る仲人口　京
障子に仕切店の取込　愚
薺篭ルあやめの風のそよ〳〵と　京
ころつく雲に晴る弓はり　喬
思へはや君まつ時は女子作（タテ）　京
笄ぬいてほぢる耳垢　愚
三徳の明りもくらい處廻り　牧（13・オ）
猫にとられた肴ことかく　愚

珍しい御客を花と敬ひて　京
朧こゝろも恥ぬ言の葉　牧

探題

雲の上に塒もあるか夕雲雀　南喬
若草や青葉の笛の先はしり　楓京（13・ウ）
薮に名のつく鶯の初音かな　冨牧
紅梅はすねるや雪の消て後　万愚

梅咲や足袋屋の夫婦寺参り　時節庵
世渡りも登るは手間の雲雀哉（14・オ）

追善　知多浦横須賀連中

爰に蕉門の棟梁たる不之庵木児老翁は一とせの歳軸に
お迎を待て今年も暮にけり
と聞へたるを彼界の教主も実よく點頭かせ（14・ウ）られけるにや
御迎の時こそ得たれ蓮の華　楓京
世の暑さのかれて清し蓮の上　如東
娑婆の苦をぬけて身軽し蝉のから　逸之

方間舎楓京『俳諧藻塩草』翻刻(5)

花に見し人も夏野や草の陰　銀河
きほうしや花の手向もしほれ咲　魯伯
蝉と共になき行野辺の別れ哉　近左（15・オ）
との道も挙句は同し蓮の花　儿梅
蓮の花にのる落付の眠りかな　二兆
消る身の名は代々照す蛍かな　其旦
乗こゝろ悟りて今や蓮の花　李三
國々の手向は多し瓜茄子　芦汀
咲はちるうき世を去ツて蓮の上　俗児
諸ともに哀れを知るや蝉の声　甫有
世の日傘ぬいて涼しや死出の山　可節（15・ウ）
折からの手向や蓮の花供養　茶朝
手向はや出來空に薫る風　珪市
涼風の名はまたしたふ別れ哉　娯夕
花さそふあらしに世をや忘れ草　幽至
折もよき經帷子の旅すゝし　先以
彼岸を合点のうへや蓮の花　柳兎

悟りてはきゆる姿も露涼し　里雀
みしか夜や安楽界へ一眠り　以琴（16・オ）
水無月や今を功徳の手向水　竹遊
きへ残る名は堆し雲の峯　里友

右二十四章悉知

不之庵五条房木児居士宝暦十三癸未六月十八日示寂

名府極楽寺末山於松林院秋九月十八日百ケ日追福ノタメ連中二十余人會合（16・ウ）

百ケ日追善百韻前書有り

なき友に啼やこゝろの羽ぬけ鳥　半掃庵也有
世は萍のわかるゝも夢　八亀
先へたつものと案内は端折て　浮木
日和癖しやといふうちに降　湖同
水もりて又居へ直す土臺石　徒平（17・オ）
只さへせまき庭のうへ込　何成
更る月一疋居ても蚊屋はまた　冥士
薮入なから母の介抱　松宇
ウ　炒鈿（アヅリコ）をかけて彼岸のおもり物　木峨

葺替しても漏桶の世話　木仝
聾の目くはせすれは早合点　不二
関さへ越せは是からは楽　巴石
波はこふ嵐に松の名高ふて　楓京（17・ウ）
殊勝な哥に泪こほるゝ　米布
つり兀に昔の残る尼子達　立和
汲はうれしき閼伽桶の月　柏葉
しんとして來る程虫の調子高　亀
角力の打身に按摩恋しき　臥雲
了簡をすれは女房の付上り　木仝
馬の便にけふの染もの　宇
やる當か有とてくれぬ花の枝　亀（18・オ）
鐘つき捨て春のゆふ暮　布
二
折角と撰ツた海雲を踏こほし　雲
聞よりねちる飴賣の笛　京
一頻りむがふ持て來た土埃り　石
お城下りの多い桜田　宇

辞義はしたけれとも終に知らぬ顔　乙阿
もはや暖簾ははつす時分しや　風仝
請船に出さねはならぬ荷物なり　峨（18・ウ）
そのからかいはおれか預る　京
新町も更れは淋しかけ行灯　平
葺わたしたるあやめさは〳〵　布
病上りなればと息子大事かり　宇
駕の小付重い風呂敷　成
並松の音冷しき朝の月　仝
うり物そふな菌一提　雲
二ウ掃切て町は祭の前さはき　京（19・オ）
日和に成ツた西のあんはい　琴五
代ものは皆調て暇乞　百也
状は跡からやろと傳言　柴
身の黒む奉公も京に馴たたけ　石
油のいらぬ髪の結ふり　宇
物好も皆唐めいた時行醫者　平

北大文学部紀要

幾つも軒に付て風鈴　阿
出しそふて何ンにも出さぬ月の宿　亀（19・ウ）
じつとなをつて居れは下冷　故郷
祝はでもよい年をして生身魂　雲
男ひとりを遣干れた　布
入相に名も日くらしの瀧の花　葉
呼子てなくは何そてはあろ　同
三
老僧は彼岸参をふあしらい　亀
勝に出た碁を崩されにけり　布
うす鍋を火鉢にかけて酒の間ン　仝（20・オ）
馴染は猫も膝をはなれぬ　江
國替も百里あまりの旅の空　同
男女のわけも見へぬ大小　二
山一つあちらすゝとい鉦大鼓　木
昼から暮れるやうな五月雨　布
能因に哥を飽せておかしかり　葉
何そほしいと茶を汲て呑　也

雑魚さへも取れいて漁の僥倖　雲（20・ウ）
蓙に覆へと秋の横日は　石
俎を直す月見の仕こしらへ　布
蚊やりのほしい程にまた居る　同
三ウ牢人となれは人にも心おく　五
うき名を笠にかくす天蓋　也
鼻紙にうけてほか〳〵あつき餅　布
何ンの荒やらけふも時雨るゝ　成
行ことは忘れて是は長咄し　仝（21・オ）
いつそやかした杜律一巻　峨
夕暮のさかいも見へす江湖部や　平
ふくへの花に月の白たへ　同
此上は最ウ葛水て酔さまし　木仝
吉原へ来た事ははしめて　雲
折節は羽織に化る御徒衆　柴
似せにしてから珊瑚樹の艶　雲
來る段になれは山家も華の春　平（21・ウ）

北大文学部紀要

雪の朝日に鶯のこゑ　同
名ヲ暖ミにつれて持病も何所へやら　風仝
毎も賑ふきおん清水　成
銭のある内は賣たい物はかり　亀
廿日の隙て十日降るゝ　柴
存分に居た灸のいほい出し　平
貴様の太り何を喰るゝ　宇
三笑といふ繪かこんな仲ま同士　石（22・オ）
涼むにはよい橋の真中　阿
銀不時のさはぎも今はよ所に見て　也
連哥と茶とに庵の安楽　宇
蔦ほとに定家かつらの赤ふ成　雲
桂のみのる夕暮のかけ　京
小鷹狩には沢山なお物好　柴
踏込泥の人をむさがる　宇
名残母親か甘ふ育た姉妹　同（22・ウ）
食事を見れはうとんてもなし　布

うつしなふこんな所に柿釘　雲
簀の子の音の四方から鳴　石
かりて來た野郎を闇にばひ取られ　木仝
格別に日の長い事哉　亀
迷すも華蔵世界の花の主　葉
線香立る上にかけろふ　同（23・オ）

其二

菩提子の数やつもりて百ケ日　柏葉
秋の名残に月のおもかけ　木仝
いさ碪うたふと老の手もさへて　米布
茶腹のはりもされとすきたり　八亀
乗合もこちらの岸に舩都合　臥雲
曇つた空の晴て夕虹　徒平（23・ウ）
酔さめを恥しそうに起あかり　楓京
返ツて來ふと供はかへつた　不二

ウ

昼中も狐くさゝの臺所　巴石
何そないかとさかす漏桶　松宇

いそかしい時てもやはり評化者　何成
人は娘とおもふ後呼　木峨
身躰はよけれと過た奢りやう　乙阿
作ツてもない松の勢ひ　風仝（24・オ）
すり違ふ舩の近付呼り合　琴五
藝子はうしろ見せて三味線　湖同
行灯をとほせは月の影さして　百也
とつと一吹風の身に入　故江
上々の瀬も尻すへて居る下り梁　布
あれか呼りは毎も雷り　京
皆酔ふて戻る花見の跡や先　阿
こちらへ欲しい春の千金　葉（24・ウ）
二ヲ永い日をしつと隠居の臺所　平
尿瓶は脇へ退る食時　石
又そこへむらかる蝿の不遠慮さ　宇
咄きく程木曾のうき旅　布
頃日の寒さは是か降ふとて　仝

ねぎを洗ふて夜食こしらへ　宇
頭痛てはなふて内義の奥這入　也
奉加も義理につまる顔つく　木仝（25・オ）
さし葺の桧皮も叶ふ薬師堂　也
面白もない栗の花さく　同
ほとゝきす末に成たと云へは云ふ　峨
吸物の香を誉て客ふり　布
弓強の影また薄きはつか山　柴
松の音から嵐はしめる　雲
二ウ下冷のするに座禅の両隣　木仝
ひよんな當名の状なふらるゝ　石（25・ウ）
真黒な男なれともさらし賣　同
義太夫ふしもちつとやるけな　五
湯の辞義も入らす湯治の壁一重　亀
ほかつて遣れはきせるいたゝく　平
後ロゆひさせとも知らぬたはけ者　五
朝ゆふ毎に愛染へ願　同

北大文学部紀要

富貴ても及ぬものは月の眉　二
外にあるまいこんな萩原　阿（26・オ）
寝起やら鹿も欠伸の口を明　同
遠寺の鐘の声も晴やか　江
その数の菩提にみのる花咲て　峨
草も不退の名を佛の座　雲

召興

石の鳥居にも節ひとつ蝸牛　甘閑窓
御ほこらの鍵穴埋めて――　仝（26・ウ）

尾城下の何某巴人風子の許にはじめての談笑に一夜をもてなされて

立ならふ蔵や屏風の冬こもり　楓京
爰は落葉に荒れた市中　巴人
駄荷馬に辷る所は声かけて　佳月
ぬかつた顔に似ぬ気点なり　京（27・オ）

ウ

吹さかる野分に傾く月の笠　人
秋をふらりと垣に瓢たん　月
菊に杖つかせて我も旅こゝろ　京

暦にまてもすよと炙の日　人
菓子盆に是はあきれる物貯ひ　月
城下呼りに聟は気の毒　京
手入から咲揃ふたる華の枝　人
いまた寒さもとれぬ如月　月（27・ウ）

二

曳舟もやゝ牧方に啼蛙　京
淋しい噺聞て眠かる　人
羽箒も茶臼のうへに休ませて　月
雪に明るい窓のくれ竹　京
更る夜に友かほしいと寒苦鳥　人
権威を繪符に早の状箱　月
盃の光り和らく人の顔　京
色里に啼むしも二上り　月（28・オ）
貧からの狐は今に退ぬやら　月
もよりに在郷名のる振袖　京
詠あふ一樹の影も華の妻　月
その花の妻むすふ種まき　人

浄土真宗の佳月尊者にはしめ俳話をなして

佳きひかり今や頼んお霜月　楓京

言の葉ちらすはつかしの森　佳月（28・ウ）

當座探題

もとかれて鰒も退さるや納戸汁　楓京

ちりはてゝ山も窄むや冬木立

世の中を反古にする気て紙子かな　佳月

おし鳥や池も名のたつ龍安寺

炭うりやその身は寒い世をわたる　巴人

おしい月の影にふたする氷かな（29・オ）

腰ノ解　未暮秋稿

人の身に腰といふ道具ありて百事万用腰を離るゝ事なし実それ父母の腰より子は出來て産に腰たきの沙汰もあれはにや五倫の道これよりひらけ高貴に腰をかゝめ（29・ウ）卑賤に腰をのばすされは心の腰のすはりたるを大丈夫と唱へ居らぬを臆病神とは云也けりさるは忠孝に入用の腰にして馬にのるも弓ひくも駕篭かくも臼ひくもすべては腰のかたまり也とそ我きく釈迦は未來に腰をすへて慈悲を示され孔子は現在に腰をかためて仁義を導かるわが敷嶋の歌の道も腰の折れぬを誉れとし（30・オ）きぬ〳〵山の帯をすると釣の翁にかへされて楽ても足腰たゝすとはかの謡の滑稽にもいへりけるされよいせ海老は腰の曲りを祝はれ意地わるは喧嘩の腰押を嫌はる居合腰はりゝしくくそたれ腰は見

るに苦し氏なふして玉の輿も腰より出たる出世成へしこの故に上手は目つかいに腰をぬかさせ下手は咄の腰を折る腰の柳に腰を（30・ウ）ぬかして國を乱し家をも身をも失ひし和漢のためしも多かれは腰より下を守給ふお烏様に誓をかけ心の腰をしかとすへ腰のあたりを用心して腰をぬかさぬ分別こそ日夜に工夫の専一ならんと我輩に談笑することしか也

獨たつ腰のかためや菊の杖

右文章ハ玄二堂

発句ハ方間舎（31・オ）

草花歌仙判し物

三ツの内二ツの猿はほとゝきす

蚊屋をつらせて花御座を敷

朱の丸を書て与市か的にして

半は時の運によるへし

此かるたまき直そふか気か悪い

目明にました座頭發明（31・ウ）

耳たふは大きく鼻の下長し

何に見とれて落る仙人

また手水つかはん内はみたれ髪

妾か腹を立てあたける
此病て人かん病に違いなし
婚礼駕篭の下手な書尺
冬中は越後信濃ゝ切退し
利にせはしなき時かりの銭（32・オ）
能見れは何事なしに寅の刻
七尺去て跡の影法師
花さかは告んと云し馬にくら
負ぬ天狗の情をはりけり
すめる世に濁るお釈迦の御方便
扨うつくしき藍甕の内
両方にお部家と奥の色くらへ
きりうの勝た娘あたゝか（32・ウ）
恋なれはこそ闇の夜に只ひとり
木に喰ふ虫の居所もなし
息たえて結句果報の贈り号
七ツ八ツにもいまた片言

八景の内に近江のひゑい山
鱸か住めは波風もなし
千日に延ひて宮居の家根普請
さかりの梅の数は百十ヲ（33・オ）
勅答か済は公家衆もお立なり
匂ひ自慢に見せかける肌
くらかさにつゝ立上る旦那殿
佃（ツクダ）に住めは何の苦もなし
渡辺を素人にして羅生門
雛のしとねに敷し毛氈
右歌仙悉知（33・ウ）
京都江戸自慢くらへ　上ノ句東都
　　下ノ句皇都
世の中の花によそへて江戸さくら
都は花のにしき染もの
御の字の付た所は江戸はかり
焼の落る大内の砂（34・オ）

秋の鯉冬あんこうにはつ鰹
鱧生鱈にわたもちの鮎
白魚の生たを直に海苔に入
はへたのを焼松たけの味
諸大名年々江戸へ御参勤
八百万神大内の番
世を照す光りの元は東かや
月日も元はこちの御先祖（34・ウ）
日本に江戸前鰻類はなし
沢山に喰源五郎鮒
極楽といふへき國はお江戸なり
水かきれると目の前のがき
ほう髭に似合ぬ京どうさんす
女の口でばかなつらだな
いやしきは女のせゝる秤の目
四百なげ出す拠もげひたり（35・オ）
江戸女少しなまりの上もなし

なぜに京から舞子かゝへる
役者てはすい市川に助五なり
上つて恥をかきし亀蔵
金持の寄りし本丁駿河丁
何れもみんな本店は京
此方は耳に飽く程時鳥
なまりぬけし都うくゐす（35・ウ）
江戸の金渡らぬ國はなかりけり
是はつかりはまけたわいのふ

明和元甲申秋　扇嶋奉納

万代も捨ぬ要やあふきしま　名府荒川多門　帰夕
露にひかりをそへる玉籬　里友
名月を楽しむ人の声みちて　楓京（36・オ）

未初冬　烏帽子奉加

三方明て北しくれ　方間舎楓京
亭の戸や　銀河
山々や　逸之（36・ウ）

北大文学部紀要

東雲や　二兆
日は照るや　竹遊
亭の戸や　蝸牛
関守の　吾生（37・オ）
苫舟や　幽至
柏手に　近左
夜は鐘に　广訶庵比皆
春の名に
日に埋む　先以
顔に袖
ふりむけぬ　以琴（37・ウ）
やさしさよ　如東
冬來ぬと
手はやくも
むさし野や
天の戸や
傘を横に

夜も既に　　楓京

夜も共に

かん〳〵と

面白や

空いろを

花やかに

風情よし（38・オ）

岡田里卜稿

光陰の端的無始無終にして日西に落れは月東に登るその乾坤のうちに華と咲実と成れる風姿風情の変化目の前に有りて予いつしか初老の坂を歩ミ越しことしはかのいふ尼の山路にさしかゝるに岩根の松にもつまつかす足にまめのなやみもなしこれよし念彼観音の（38・ウ）力なるをやさるから心に老をうけかはすいさ立寄て鏡山にも向はねは額の波も白川夜舟なれやきのふは少人けふは白髪の詩客の媚も哥人のぬめりも胡椒丸呑の俗話に遊ひて月の夕へ雪のあした諷諫の花にうかれては談笑の鳥に囀らる一碗一盞を虚実の中に楽しみ童心を旨として只長生不老を祈り誓ふことにそありける

老せぬやわれはこゝろの若みとり（39・オ）

西林館里卜子か尼年を賀して

ことふきの子の日や高き岡の松　　方間舎楓京

北大文学部紀要

友と見ん老せぬ松に梅さくら　銀河
四十二や松も千とせの若みとり　逸子
千代までも若きためしや餝竹　如東
釣の糸の竹を友とや若ゑひす　烏喬（39・ウ）
松千とせ經て囀らん四十から　幽至
友を知る松や千とせの松の色　芦汀
年の蓋明てかほるや梅の花　其旦
四十二のふしはぬけたりかさり竹　娯夕
四十二のことふき長し竹の秋　里雀
年々に齢こめてやかさり竹　近左
四十二相もの足らひけり梅桜　竹遊
千代の松には四十二を若みとり　里友（40・オ）

甲申十三夜　蓮阿房

豆畑へ都僊すや後の月

短哥行　独吟　方間舎楓京

川狩や刀のうへもわすれ水
暑さむらたつ雲に弓張

二階から呼手を急にたゝかれて（40・ウ）

古参にまけぬ今参り也

ウ

十露盤に昼は商ひ夜は縉（サシ）

空も師走の雲の取やう

唐崎もそこに打出の濱ちとり

お哥の出來る間を居眠る

振袖にそはへて猫のかけ廻り

先ついでみてほかす割レ物

楽しみの非番待得て花もよひ（41・オ）

霞につゝむ鐘は浅草

二

橋守は日脚も長き欠伸して

斯ふへるものか今喰ふた腹

こゝろ元ないは命婦の御行衛

雪に埋る端山茂山

聞なれぬ鳥の一聲啼捨て

余念をぬける十念の徳

澄わたる月も圓かに下地窓（41・ウ）

踊の留主に髭の根絶し

名　切盤にのせて西瓜を持出し

顔をたはけに見せる八蔵

色も香も含むこゝろの花の奥

小路も錦綾のいとゆふ

腰ノ解余興句

蟷螂の鎌にさへあり居合腰　方間舎

山雀の輪貫も腰の力かな（42・オ）

挨拶

よこれるといふ程もなし朝氷　句主不知

汲茶もぬるき庵の埋火　関花林堂知六

濃州北野大智寺ノ境内ニ獅子庵有梅花佛鑑塔モアル由

東ニ遊時ハ東花房　蓮二房

又ハ　十一庵トモ云由

西ニ遊時ハ西花房　見龍

支考（42・オ）

浄山義海和尚は老來病を愁へて肉眼を失はれけるか生涯柔軟忍辱の修行力薄からされは末後轉身の折からも心眼は

聊瞬き侍らし

卯の花のあの世の道も明るかろ　甘閑窓

中元

けふは祢宜も佛拝むやたま祭　海棠庵（43・オ）

雨尾山懐紙掛物裏銘

法印義忍大和尚は如法篤實にして台家の堂奥に座臥し淳朴寛宏にして慈忍の正路に來往し給ひ終に正念遷化を遂給ふその生前や我たつ杣と詠し給ふ祖師の昔をしたひて和の風俗に遊はせ給へは予も筆学の師たるを（43・ウ）初とし尚この道の弟と成て蛙鳴の蜂腰を綴り習ひ侍り尋るに今の院主在世の詠一片を表具し餝りて是に筆せよとあるにそいなみかたくて卑語に記し待るものしかり

坂丈右衛門正盈盥手再拝　謹誌（44・オ）

城府明之房竹郎撰集守尽集入吟

祝　御垣守　知多之浦横須連中

雪の花つほんて寒し御垣守　方間舎楓京

ひたき鳥から夜は明て啼　明之房

鞍置た馬はその儘繋かれて　如東（44・ウ）

酔はぬといへと足かふらつく　茶朝

隠居より庇つたひの七曲り　里友

時計の数に合ぬ拍子木　近左
相談も半なからに傾く月　竹遊
秋風わたる江口神崎　以琴

右八句表　甲申の秋入集九月尽

右表明和五春明之房再来ニテ四句目より仕直シ哥仙一折ニ致シ遣ス十三巻目ニ有リ（45・オ）

時節庵古翁の像供養ノ節文臺銘　画ハ也有公

表

うたかふな
うしほの花も浦の春　芭蕉翁

二見とは松の朝日に
梅の月　蓮二房

銘

画アリ

裏　此文臺は二色をひとつに
物数寄たるに候へは

書　右の二章を書もの也

木児　花押　（45・ウ）

四六韻　独吟

五　濡てみるこゝろの寂ひや初しくれ

五　招いた萩も枯て神垣

五　菊苞の内は何やら状そへて

七　顔は知つても名は忘れたり

五　気色さへ常とは違ふけふの月

妻こふ鹿に哥聞せたい

三　茸狩は付たりにして御所女中（46・オ）

三　和尚の留主をあらす酒盛

十　唐紙を明りや柱も取たかり

五　片帆霞ンて嶋かくれ行

七　頭陀ひとつ日遣に華の旅日記

三　めつらしふりてすゝむ草餅

十　笑ひにも天井なしの若世帯
五　田舎へ下す荷に送り状
三　仕形てもどんな聾としんきがり
十三欲から掛る恋の二道（46・ウ）
二　月の出ぬ内はてか〳〵稲ひかり
三　手作の瓜にそへて小刀
五　僧がらもさすか都の甥坊主
三　嬉し泪も老の正直
七　御年貢を納て春を待はかり
二　畳かへたて座敷めくなり
三　花の香を風に運んで向山
五　稲荷も引はわけぬ初午
右百弐十点　　大野　巨扇（47・オ）

郭公啼や無言の亭主ふり　　時節庵
卯の華や隣知すの雪曇り
杣は下りて食くふ時やかんこ鳥
一ト隅は仕事につらぬ蚊帳哉

曇らせて鳩に渡すやかんこ鳥

佛さへ生れる時は木下闇（47・ウ）

近き頃語らひける境内の道の普請の雨遠き一徳にそゆひ折る日数の先に出來ぬこの道や宿昔の望成にそ造作の多きあとさきも見ぬか佛と懸り仰せて其喜ひの初迎へに双親を招かむには一は遠く在し一は俄にむかえ難きに二胞兄のあるを幸に其名代を乞侍りて率尓に（48・オ）迎ひの芥子坊をつかはす

挨拶

道の辺や柳まて我か招きつれ　　甘閑窓

予多年の望ありて今年この春一宇の客席を造営しけるに工匠も風雅に虚実自在のはたらきありて日あらすしも棟上のけふに至りたれは

梅清し念比はやの華工匠　　市中林（48・ウ）

（続く）

（付記）

資料の閲覧、写真複写、及び翻刻の許可を下さった愛知県立大学附属図書館に感謝致します。また、本稿を成すに当っては、鈴木勝忠氏に色々と御教示頂きました。併せてお礼申し上げます。